

のびやかさは、今も！

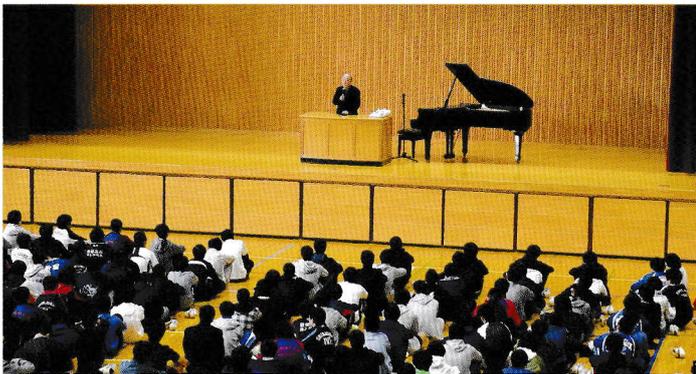
同窓生シリーズ 第91回

15回生 池辺 晋一郎 Shinichiro Ikebe



水戸市生まれ。1971年東京芸大大学院修了。66年日本音楽コンクール1位。以後、ザルツブルクTVオペラ祭優秀賞、イタリア放送協会賞3度、尾高賞3度、毎日映画音楽賞3度、日本アカデミー賞優秀音楽賞9度、放送文化賞、紫綬褒章など。作品：交響曲10曲、オペラ10曲他。映画・演劇・放送音楽多数。著書多数。横浜みなとみらいホール館長、東京オペラシティ・ミュージックディレクター、石川県立音楽堂洋楽監督他。東京音大客員教授。

先日（12月21日）新宿文化センターで、クラス対抗の合唱コンクールの一部を聴きました。第54回とのこと、びっくり！今回、2年生の課題曲として、新しい曲をひとつ書いたので行って見たというわけです。生徒からの応募詩から、朝倉環さん「ひとしお物語」を選び、作曲。依頼を受けたものの、合唱の水準が分からない。確かめる時間もなく書き、大丈夫なのだろうか…と懸念していましたが、各クラスが整然と歌いきるので、感心しきりでした。都のコンクールなどで示す音楽部の力も、とても高い由。僕が高校生だったのは1960〜63年。それから半世紀以上経って、何もかもが変化したことに、あらためて驚愕を抱きます。僕も合唱をやっていました。都のコンクールでは、都立八潮高校には絶対かなわない——歌う前から、代表になることはあきらめていました。新宿高校は今、まさに昔の八潮高校のような地位と聞き、またまたびっくり。中学（世田谷区立北沢中）でプラスチックバンドをやっていた僕は、入った新宿高校にその種の部活がないので、当時朝日新



2016.11.16 本校体育館での講演会の様子

聞社が全国展開をしていたジュニアオーケストラの東京本部教室に入団。しかし周りは音楽高校生などで皆、とてもうまい。こりやダメだ。数か月でやめ、校内でオーケストラ部を作ろうと呼びかけました。要するに「お山の大将」になろうともくろんだわけ（当時、自分では「鶏口牛後」と言っていましたね）。これが今の新宿高校管弦楽部。音楽ばかりやっていたのでもありません。演劇や映画が好きで見まくっていました。スポーツにも興じました。隣接する新宿御苑へは、誰かが塀に開けた穴から毎日のように侵入。ある日の朝礼で生活指導教官が訓示を垂れましたつけ——「昨日また御苑に入った奴がいる。昨日は公的な園遊会だった。ゆえにすぐばれてつまみ出された。これからはよく調べて入れ！」



2年間で数Ⅲまで終えてしまい、3年次では問題集ばかり、という受験校。なのに、何とのびやかだったことか…。その中で音楽を志した僕ですが、作曲家としての自分の原点は間違いなく新宿高校、と思うのです。そして現在、同期生たちは信じられないほど広範な分野に散らばっている…：政界、経済界、学術界、芸術界…。

何もかもの変化。にもかかわらず、あののびやかさは今も持続しているはず——合唱の課題曲を書く僕の思いは、そこに収斂していました。

2年生 課題曲 「ひとしお物語」

朝倉 環 作詞  
池辺晋一郎 作曲



一 ひととは何から できているのか  
それは ひと掬いの塩から  
私の胸の音を聴け 耳を澄ませ  
聴こえるだろう ほら潮騒が  
力強く美しい たぎる血汐 波打つ鼓動  
それらはみな 生命の証  
潮のエネルギーが引き出す 生命の証  
何度溶かしても 何度固めても  
決して丸くならない  
ただ ただ四角い その結晶  
幾千の時を越え ひとの手から手へ  
時代を染め 争いを起こし 心を浸す  
その味の しおからさ  
ひととは塩 生物とは塩 海とは塩  
世界とは 地球とは 宇宙とは  
塩 塩 塩

二 ひととは何処から 来たのだろうか  
それは はるか遠い海から  
名も知らぬ溟海の底 目をとじて  
見えるだろう ほら故郷が  
温かく心地よい 母の胎内 父の腕のなか  
それらはみな 生命の証  
海底の潮にうづくまる 生命の証  
何度溶かしても 何度固めても  
決して量が変わらない  
ただ ただ不変の その結晶  
幾千の境を越え 国から国へ  
ひとを魅了し 欲を掻き立て 心を酔わす  
その味の しおからさ  
ひととは塩 生物とは塩 海とは塩  
世界とは 地球とは 宇宙とは  
塩 塩 塩